

「抹茶はいつから緑色のものが飲まれたのか」

2022年9月25日

日本茶アドバイザー専任講師 三角直道

専任講師による会員向け講座「意外と知らない『歴史に登場する“茶”とは』」でのご質問、「抹茶はいつから緑色のものが飲まれたのか」について、文献などにより該当する部分を拾って、改めて確認してみた。

抹茶はいつから緑色のものが飲まれたのか？

1. 「日本茶業発達史」大石貞夫著 農文協 2004年 第1刷

・ロドリゲスのみた覆下栽培 (天正五年(1577)来日し、30年余 日本に滞在)

栽培法について記した最初の人である。『外国人のみた茶の湯』(岡田章雄訳、1973)による。茶の栽培方法を紹介し、「主要な産地である宇治の村では、霜害を防ぐために茶園に棚をつくり、葎かわらの藪で全部を囲い、二月から三月の末まで霜よけを作る。・・・」これは安土桃山時代(1568～1600)から江戸初期の宇治村を中心とした碾茶栽培と製法を記したものであるが、秀吉、利休の時代であり、大名茶全盛期の記録である。この時代はすでに覆下茶が作られていたことが明らかである。P.241

・『本朝食鑑』は人見必大という元禄期の侍医の著わした食物本草学の書であるが、…元禄十年(1697)の刊行である。…また、春防霜のために葎萱を編んですだれを張り茶園をおおう。その時期は節分の後四十八日めに行う。八十八夜を越せばおおいを取り除く。P.268

碾茶(ひきちゃ)の茶は城州宇治の茶が第一で、県吏(けんり)上林および数十家で茶園をかこい茶を摘み、…京都、江都の市上(まち)でうられる碾茶は、悉く宇治より伝送して販売されるものである。その他の州で碾茶の茶を産するところは全くない。P.269

2. 「日本茶の歴史」橋本素子著 淡交社 平成28(2016)年 初版

(1) 冷霜害には弱い

・永禄年間(1558～70)三月二十九日付、堺の豪商で茶人の津田宗閑宛の「千利休書状」には、宇治茶の初摘みを四月四～五日頃行う予定ではあるが、新芽が霜の害に見舞われたため、茶の壺詰めを十四～十五日頃に延期して行いたい旨が記されている。このあとの天正年間(1573～92)の宇治では、新芽が出る時期に茶園全体に覆いをかけて栽培する覆下栽培が登場する。この様子は、ポルトガル人宣教師ジョアン・ロドリゲスの『日本教会史』に克明に描かれているところで、覆いをかける目的は、霜よけであった。…長年にわたって霜の害に悩む宇治の茶師たちが、これを防ぐために様々な試行錯誤を行い、覆下栽培を生み出すに至ったと考えるべきだろう。P.86～87

・南北朝時代(1336～92)に成立した『異制庭訓往来』では、名産地の一位は、「本茶」と称され母尾高山寺であった。宇治はその補佐=第二位に列せられるも、仁和寺など六ヶ所の補佐のうちの一つに過ぎなかった。P.100

(2) 七名園^{注1)}

中世の宇治茶といえば、足利義満（三代将軍（1369年～1395年））によって六名園、のち七名園が作られ、室町将軍家の保護を受けたとされてきた。P.108

注1) 宇治市 HP「宇治七茗園について」

… また室町時代には、将軍の足利義満に命じられた大内義弘が、宇治に茶を植え七つの優れた茶園が生まれた。

七つの優れた茶園は『宇治七茗園』と呼ばれ、中宇治地域に「宇文字園」、「川下園」、「祝園」、「森園」、「琵琶園」、「奥の山園」、「朝日園」が存在していた。これらの茶園は「森、祝、宇文字、川下、奥の山、朝日につづく琵琶とこそ知れ」と和歌にも詠まれて宇治茶の発展の礎となった。現在では、ほとんどの茶園がなくなってしまい、宇治善法にある「奥の山園」（茶の木は宇治市の名木百選のひとつ）のみが残っている。

(3) 覆下茶園の登場

・永禄年間（1558～70）頃から、宇治では「茶の湯」を愛好する茶人たちの要望を受け、新しい抹茶づくりを模索していた。P.116

・天正（1573～92）末年頃、宣教師ジョアン・ロドリゲスが著した『日本教会史』には、「そして使用に供される新芽は、非常に柔らかく、繊細で、極度に滑らかで、霜にあえばしぼみやすく、害をこうむるので、主要な栽培地である宇治の広邑では、この茶の作られる茶園なり畑なりで、その上に棚を作り、葦か藁かの蓆で全部をかこい、二月から新芽の出始める頃まで、すなわち三月の末まで霜にあたって害を受けることのないようにする。」とある。覆下栽培を行うための最大の目的は、今日説明されるような、うま味成分を増やすことではなく、あくまでも「霜よけ」にあった。
P.116

3. 京都府HPより

・宇治で発明された覆下栽培

12世紀初頭に伝来したと言われている中国宋王朝の抹茶法では、チャの栽培は露天によるものであり、日本に特有の高級茶である抹茶や玉露を生み出した覆下栽培は宇治で発明されたものである。宇治で覆下栽培が始まったのは、16世紀後半頃と推察される。覆下栽培は、権中納言山科言経（ときつね）（1543～1611）の『言経卿記』^{注2)}に覆下茶園の記載が見られ、また、16世紀後半に宣教師とともに来日し45年間日本に滞在したポルトガル人ジョアン・ロドリゲスの「日本教会史」にも記載が見られる。

注2)『言経卿記』（ときつねきょうぎ）は、安土桃山時代の公家の山科言経による日記。

天正4年（1576年）から慶長13年（1608年）まで30年以上書かれた。

4. 宇治市史2「中世の歴史と景観」宇治市役所 昭和49年（1974）4月10日

・宇治茶の成立 宇治が茶の産地として知られ、宇治茶とよばれる特定の銘茶が生まれたのは、すでに南北朝時代（1336～1392）のことである。そしてそれは、当時すでに本茶とよばれた梅尾茶に、直接相次ぐ銘茶として考えられていたのである。室町時代（1338～1573）には、幕府や大名関係の

七種の名園はもとより、広い地域にわたって茶園の売券が見出されるようになる。・・・宇治茶の名声は、ほぼこの時期に確立していたと思われる。そのような名声は、その生産技術の面でも山蔭や藪北の利用などによって、茶の柔らかな芽を摘採する努力を重ねていたであろうが、特に覆下栽培を考案した点で、全国に冠たる位置を占めたといえる。

ジョアン・ロドリゲスの『日本教会史』に、「茶園の上に棚をつくり、葦か藁かの蓆で全部をかこい」という栽培方法が明記されていて、桃山時代には特性の茶も作られていたことが明らかになった。ロドリゲスの日本滞在は、1577年から1610年にいたる30余年間で、それ以前にすでに宇治には覆下茶園の景観が点在していたこととなるのである。その考案者は定めにくいだが、生産者の智慧であったことはまちがいない。 P.8～9

・覆下茶園の登場 P.633

茶業における質的な大転換である覆下茶園が安土・桃山時代の史料にすでに登場することも大いに注目しなければならない。従来日本の製茶技術のなかで他国に類を見ない独創的な技法としての覆下茶園の方法が、いつごろから生み出されたか判然とせず、ほぼ近世初頭ぐらいに考えられてきた。すでに茶名としてもある藪北やかげ芽の発想は覆下と同様で、日光の十分あたらない木陰の茶が上質であることは経験的にはかなり古くから知られていたに違いない。しかし、人工的に日光の量を調節し、最後は遮光率90%近い覆の下で成長を待ち、茶葉が薄くやわらかく、しかもより多くの日光をとらえようと葉緑素が増加し、不十分な炭酸同化作用によって糖化した澱粉質の沈滞を得て、うま味のある茶をつくろうとした、いわゆる覆下茶園の技法は江戸時代まで下らないと確かな史料が見出せなかったのである。ところが、先にふれたロドリゲスの『日本教会史』にすでにこの覆下が登場してくる。『主要な栽培地である宇治の広邑（ヴィーラ）では、この茶の作られる茶園なり畑なりで、その上に棚をつくり、葦か藁かの蓆で全部をかこい、二月から新芽の出はじめる頃まで、すなわち三月の末まで霜にあって害を受けることのないようにする。』ここでは専ら霜害の防止のためと覆下の効能を考えているが、むしろ、その最大の効果は茶味そのものにあったことはいうまでもない。ロドリゲスの『日本教会史』はほぼ1622年以後にマカオで記したものであるが、その執筆の素地となる体験は天正年間（1573～1592）末から慶長年間（1596～1615）にかけてであったから、まず安土桃山時代の宇治には覆下の技法が一般化していたとみてよいのであろう。 P.637～638

5. 宇治市史3「近世の歴史と景観」宇治市役所 昭和49年（1974）4月10日

・「宇治此頃は茶の所となりて いづこも 〳〵 皆園也、山の土は朝日焼の茶碗となり、川の石は茶磨となる、竹は茶杓茶筌にくだかれ、木は白炭に焼かれて茶を煎る」茶処となったのであり、中世末期以来行われていた覆い栽培もまた宇治郷のみの特権であったのである。 P.17

・茶師の身分 徳川幕府という大きな力が日本全国をひとつの枠にはめて支配するようになると、宇治茶師もその枠の中で茶の生産業務に従事することとなり、おのずから型に嵌った行動を繰り返すことを余儀なくされる。しかし、宇治独特のものであった葎（よし）や藁によって茶園を覆ういわゆる覆下茶園の栽培は、元来は指定された宇治茶師のみに許可されたという特権であり、宇治茶師が他地域の製茶業者とは異なった道、すなわち、碾茶づくりの道を歩んだことは言うまでもない。 P.132

・もともと茶園の覆下栽培は宇治茶師三仲ケ間に属する者に限って許可されていたものであったが、元禄 11 年（1698）の大火をはじめとする再三の火災に多くの高級茶園を焼失したことや…、多くの災害の経験から、非常の時に備えて次第に宇治近在の百姓が栽培する茶園に覆い掛けを許すようになっていった。P.154

・宇治茶とその銘柄

「無名」『実隆公記』享禄 3 年（1530）11 月 2 日条 初見

「極上」天正 9 年（1581）2 月 13 日山上宗二の催した茶会で闘茶が行われた。最も古い例。

「極上」の登場以後、濃茶には専らこの茶を用い、従来の別儀などの茶は薄茶用として用いられることが多くなってゆく。その意味でも「極上」とは、旧来の茶を克服した宇治茶の最高級品をしめす言葉として定着化していったことが分かる。・・・ それは、とりもなおさず、この頃に覆下茶園の技法がかなり一般的になったことに他ならない。人工的に日光を調節することにより、薄くてやわらかな葉を育て、うまみのある茶をつくろうとしたこの覆下の技法は、すでにロドリゲスの『日本教会史』によって紹介され、中世末にかなり一般化していたことはすでに第二巻に詳述されている。P.185～189

6. 「お抹茶のすべて」桑原秀樹著 誠文堂新光社 2019 年増補改訂

覆い下栽培

ポルトガル人の教会司祭、ジョアン・ロドリゲス著『日本教会史』によれば、16 世紀後半の天正年間（1573～92）に、宇治においては覆い下栽培が一般化していたのがわかります。覆い下栽培の発明によって、抹茶は様々な面で劇的に変化しました。それまでは色が白く苦渋かった抹茶が、鮮やかな緑色したうま味のあるものになりました。

最初は霜の害を受けないようにと始められた覆いですが、覆いをすることによって碾茶の色、味、香りが露地の碾茶に比べ非常に良くなりました。P.34

7. 日本土壌肥科学雑誌 第 90 巻 第 6 号 P. 424～432（2019）

京都府宇治市の茶園土壌を用いた覆下栽培の発祥時期の推定

・茶の栽培は、通常露地栽培で行われる。しかしながら、宇治地域では、古くから良質な茶を生産するために、春、新芽の生育中、茶園を稲藁や葦簀の遮光資材で被覆し、一定期間（約 20 日間）、光を遮って（最終遮光率約 95%）育てる覆下（おおいした）栽培という栽培法によって茶が栽培されている。この栽培法では、防霜効果とともに、露天で栽培される煎茶にはない鮮緑色と、独特の芳香やまろやかな旨味・甘味のある茶ができる。

・茶の覆下栽培（被覆栽培）の発祥時期を明らかにする目的で、京都府宇治市の伝統的茶園、宇治七茗園のうち現存する唯一の茶園（奥の山茶園）において、在来種で古いとされる茶樹直下に試坑を作製し、土壌断面調査とともに、炭素含量、植物珪酸体組成、年代値を調べた。

・これらを総合的に考えると、覆下栽培は少なくとも A 層生成開始時の 1400 年代に行われていたことはほぼ間違いないと判断される。これまで覆下栽培に関する記録は、1577 年に来日したポルトガル人通詞ジョアン・ロドリゲスが 1604 年に著した『日本教会史』や権中納言山科言経の『言経卿記（1576～1608 年の日記）』があり、これによって 16 世紀後半には既に覆下栽培が行われて

いたと考えられていた。本研究は覆下栽培の発祥時期がそれより少なくとも 150 年は遡る 15 世紀前半を示す新知見と言える。

【まとめ】

- ・抹茶の色は、覆下栽培が始められてから現在と同様に緑色となった。
- ・覆下栽培が始められた時期は、16 世紀後半の天正年間（1573～92）頃からと考えられる。また、覆下栽培は宇治で初めて行われ、当初の目的は「霜よけ」であった。

なお、

- ・『永禄年間（1558～70）三月二十九日付、堺の豪商で茶人の津田宗閑宛の「千利休書状」には、宇治茶の初摘みを四月四～五日頃行う予定ではあるが、新芽が霜の害に見舞われたため、茶の壺詰めを十四～十五日頃に延期して行いたい旨が記されている。』（「日本茶の歴史」橋本素子著 P86）としており、永禄年間では、未だ覆下栽培は行われていなかったことになる。
- ・今回、参考とした文献の著者が覆下栽培の時期とした史料・根拠は、いずれもロドリゲスの『日本教会史』を拠りどころとしている。ただし、京都府HPと日本土壤肥料学雑誌は、山科言経の『言経卿記』に覆下茶園の記載が見られることを併記している。
- ・最近行われた土壌断面調査では、さらに 150 年ほど遡る可能性も指摘されている。

以上

注記：年代

- 1) 南北朝時代（1336～1392）
- 2) 永禄年間（1558～1570）
- 3) 天正年間（1573～1592）
- 4) 安土桃山時代（1568～1600）

《参考文献等》

1. 「日本茶業発達史」大石貞夫著 農文協 2004 年 第 1 刷
2. 「日本茶の歴史」橋本素子著 淡交社 平成 28（2016）年 初版
3. 宇治市 HP www.city.uji.kyoto.jp/site/uji-kankou/14231.html
4. 京都府 HP www.pref.kyoto.jp/nosei/documents/1338947776130.pdf
5. 宇治市史 2「中世の歴史と景観」宇治市役所 昭和 49 年（1974）4 月 10 日
6. 宇治市史 3「近世の歴史と景観」宇治市役所 昭和 49 年（1974）4 月 10 日
7. 「お抹茶のすべて」桑原秀樹著 誠文堂新光社 2019 年増補改訂
8. 日本土壤肥料学雑誌 agriknowledge.affrc.go.jp/RN/2030930770.pdf